農作業 テクニカルダイアリー

Agricultural-work technical diary

水稲

営農部営農振興課
営農指導員　石井　枝里奈

ジャンボタニシ・雑草防除は稲刈り後から!!

年々増加しているジャンボタニシ(正式名称：スクミリンゴガイ)や、難防除雑草のオモダカ・クログワイは、春の田植え後に発生してからでは防除しきれません。秋の稲刈り後から対策をして、翌年の発生密度を減らしておくことが重要です。

ジャンボタニシ対策

ジャンボタニシ(写真❶)は秋の水温低下や落水とともに土中に潜り、翌春まで越冬します。越冬数を減らす対策をしましょう。

対策① 石灰窒素の散布
(※稲刈り後に湛水可能な圃場に限る)

水温15℃以上の時期(9～10月)に湛水することで、ジャンボタニシが土中から出てきて、活動を始めます。その時に石灰窒素を10アール当たり20～30キロ散布し、死滅させます。

写真❶
ジャンボタニシ(成虫)

対策② 早期の稲わらのすき込み

翌春まで稲わらを残しておくと、その下が保温されるため、ジャンボタニシが越冬しやすくなります。できるだけ早く稲わらをすき込むことで越冬場所を減らします。分解促進材(わらゴールド、アグリ革命など)を使用すると効果的です。

対策③ 厳寒期に数回耕うん

厳寒期に丁寧に耕うん(走行速度は遅く、回転数は速く)し、越冬中の貝を物理的に破壊します。また、地表面に出して寒さにあてることで殺貝します。これらを繰り返し、翌春の発生密度を減らします。

難防除雑草対策

多年生雑草のオモダカとクログワイは、稲刈り後の9月下旬～11月上旬に塊茎を形成し、翌年に再発生します。田植え時の一発処理除草剤だけに頼らず、秋～冬期にも対策しましょう。

①稲刈り後、早めに地下部まで枯らす茎葉処理除草剤(ラウンドアップマックスロードやタッチダウンiQなど)を散布し、塊茎形成を阻害する。

②秋期の耕うんにより塊茎を地表面に出し、冬期の乾燥により枯死させる。

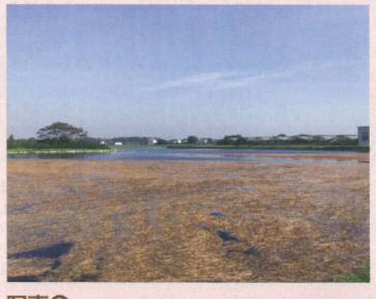
台風15号通過後の圃場対策

●稲わらの堆積

暴風雨により、稲わらが堆積している圃場が多く見られます。堆積した稲わらをそのまま放置して翌年の代かき時期を迎えると、腐熟が進まず、田植え後のガス害による生育不良が懸念されます。

早めに稲わら分解促進剤を散布して、すき込みを行ってください。

◎わらゴールド(30～60キロ／10アール)
◎アグリ革命(2キロ／10アール)
◎アグリ革命アクア(100ミリリットル／10アール)



写真❷
暴風雨により圃場の隅に寄った稲わら

最新情報をお届けします
「営農情報メール」配信中!　登録無料!!
作柄情報　病害虫対策　青果物概況　イベント案内　など
◆ご登録は、右記のQRコードまたはJA山武郡市のホームページから!
(スマートフォンもしくはパソコンのメールアドレスをご登録ください。)
◎JA山武郡市の組合員なら、どなたでも登録できます!!

春ニンジン

営農部営農振興課
営農指導員　松本 有希子

「ニンジンハネオレバエ」にご注意ください

千葉県内の春ニンジンにおいて、「ニンジンハネオレバエ」という新たな害虫による根部食害の被害が発生しています。JA管内でも被害が確認されていますので、生態と対策をお伝えします。

生態と対策

●発生時期

4月上旬～中旬の露地トンネル栽培でトンネル被覆を除去する時期に、成虫が飛来。

●虫の特徴

成虫(写真❸)の体長は5～6ミリ。頭部に黒色三角紋様や胸部に3本の黒い縦線があり、土壌中に産卵します。

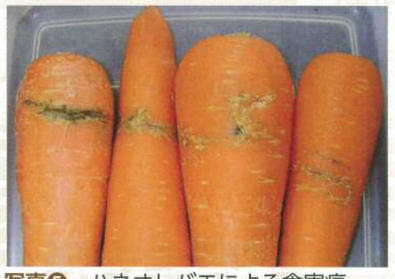
幼虫(写真❹)は体長6～8ミリ。体色は乳白～淡黄色です。

写真❸　ハネオレバエ成虫
(写真提供 千葉県農林総合研究センター)

写真❹　ハネオレバエ幼虫
(写真提供 千葉県農林総合研究センター)

●被害の様子

孵化した幼虫が根部の表面を食害し、根部に黒い筋が入ります(写真❺)。侵入は表面付近に留まり、芯部まで食害することは、ほとんどありません。



写真❻　ハネオレバエによる食害痕
(写真提供 千葉県農林総合研究センター)

●防除対策

現時点ではニンジンハネオレバエに登録を持つ薬剤はありませんので、耕種的防除が必須です。写真❺のような被害が見られた場合には、次のような対策をしてください。ニンジンハネオレバエは特にセリ科雑草(例：セリなど)を好みますので、圃場周辺の除草を心掛けてください。また、被害を受けた根などの収穫残渣は次年度の発生源となるので、必ず圃場外に持ち出し、処理してください。

収穫・出荷時の注意

春ニンジンは、収穫が進むにつれて気温が上昇するため、収穫後の品質が秋冬ニンジンよりも早く低下する傾向にあります。収穫から日数がたったものを出荷すると、表面が傷んで変色(写真❻)し、クレームにつながる恐れがあります。一度に多く収穫して掘り置きしたりせず、収穫翌日に出荷できる量の掘り取りを心掛けましょう。また、梅雨時期におけるしみ腐れ病の発生や高温多湿による品質低下、後続産地との兼ね合いから、作付けは6月末に出荷を終えることが可能な面積にとどめることをお勧めします。

写真❻　春ニンジンの傷み(皮目が変色している)

8月の土壌診断点数 …… 合計43点